

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02718

研究課題名（和文）古代日本語における形容詞述語文主語標示の形態論的研究

研究課題名（英文）Morphological study of adjective-predicate sentence subject marking in old Japanese

研究代表者

高山 道代（Takayama, Michiyo）

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：70451705

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：日本語の格標示に関しては、研究史において格標示機能それ自体をどのように認めるのかといった根本的な問いが見過ごされ、研究意義が十分に理解されていない状況にあった。そこで研究をはじめに、格標示機能の研究において名詞- の機能を分析対象とすることの意義について検討をおこな

い、論考（高山2017、2018）としてまとめた。研究開始当初は古代日本語における「質形容詞」、「状態形容詞」の分類を再検討する計画であったが、コロナ禍において研究遂行が困難になったことから計画を見直し、「状態形容詞」に関する調査を先行させた。分析段階で研究期限を迎えたため、今後も分析を継続し論文化していきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代日本語の状態形容詞を述語とする文における格標示機能の一端を明らかにし、形容詞を述語とする文の構造について、新たな視点で検討できる。

研究成果の概要（英文）：Regarding case marking in Japanese, the fundamental question of how to recognize the function of case marking itself has been overlooked in the history of research, and the significance of the research has not been fully understood. Therefore, at the beginning of my research, I considered the significance of using the function of noun - as the subject of analysis in research on case marking functions, and summarized the results in papers (Takayama 2017, 2018). At the beginning of the research, the plan was to reconsider the classification of "qualitative adjectives" and "stative adjectives" in old Japanese, but as research became difficult to carry out due to the coronavirus pandemic, the plan was revised and The investigation was advanced. Since the research deadline has reached the analysis stage, I would like to continue the analysis and publish it in a paper.

研究分野：日本語学

キーワード：形容詞述語 格標示 形態論

1. 研究開始当初の背景

代表者はこれまで、動詞との文法的意味関係をつくる主語形態について研究を進めており、以下の点はすでに明らかになっている。1) 動詞文の主語標示は、行為性の低い運動をあらわす変化動詞文の主語には名詞- をとり、行為動詞(行為性の高い他動詞や一部の自動詞)文の主語には名詞-ノ、名詞-ガをとる傾向があり、述語となる動詞の文法的意味と名詞形態とに関連性がみられる(高山 2003ⁱ、2004ⁱⁱ、2006ⁱⁱⁱ)。2) 構文的側面においては従来から指摘があるように、名詞-ノ・名詞-ガは連体節内部の主語として用いられる傾向があるが、平安期において連体節主語標示としては名詞-ノが名詞-ガよりも広く用いられている。一方、名詞- は主節に多くもちいられる傾向があるが、各種の節においても広く使用がみとめられる(高山 2008^{iv})。3) 主語名詞のカテゴリカルな意味の面では、より一般性の高い人名詞には名詞- が広く用いられ、固有名詞や代名詞などの「特定性」の低い人名詞は名詞-ガが特徴的に用いられ、名詞-ノは一般性の高い人名詞から物名詞まで広範囲にわたって主語標示する傾向をもつなど、3形態の対立がみとめられる(高山 2008、2010^v)。上記の研究内容に加え、代表者がこれまでに進めてきた動詞との文法関係をつくる対象語形態の諸用法についての論考は、『平安期日本語の主体表現と客体表現』(2014 年刊行 ひつじ書房 平成 25 年度科学研究費助成事業研究成果公開促進費学術図書 課題番号 255067)としてまとめている。

また、若手(B)採択課題「平安期日本語主語標示の形態論的研究」(平成 23 年 4 月～28 年 3 月 課題番号 23720227)では、これまで動詞述語文の主語標示に限定してきた研究対象語を拡充し、形容詞述語文の主語標示に用いられる諸形態についての記述的研究にとりくみ、主語標示形態によって表現される感情形容詞の対象については形態論的観点から分析し論考をまとめた(高山 2012^{vi})。しかし、形容詞述語文全般における格標示機能については課題として残されていた。

2. 研究の目的

古代日本語の形容詞分類の再検討と格標示機能の分析をおこない、形容詞述語文の構造の一端を明らかにすること。

3. 研究の方法

形容詞が述語の位置に現れたときに表わす意味的なカテゴリーにより形容詞分類をおこない、一次資料の検討をおこなう。また、形容詞述語文の格標示として現れる名詞形態に着目し、各形態の機能について記述的分析をおこなう。

4. 研究成果

本研究の研究計画書でも述べたように、日本語の格標示についての研究史において、助辞付与形態に研究対象が限定される傾向があり、格標示機能それ自体をどのように認めるのかといった根本的な問いが見過ごされてきた。助辞付与のない形態(名詞-)を他の助辞付与形態とともに格標示形態の一つとして認め、格標示機能を体系的に捉えようとする研究は既におこなわれていた(鈴木重幸 1972^{vii})にも関わらず、その研究の意義は十分に理解されていない状況にあったことから、本研究をはじめめるにあたり、格標示機能の研究において名詞-の機能を分析対象とすることの意義について検討をおこない、論考(高山 2017^{viii}、2018^{ix})としてまとめた。

研究開始当初は古代日本語における「質形容詞」および「状態形容詞」の双方を調査対象とし、形容詞分類を再検討する計画であった。しかし、コロナ禍において研究遂行が困難になったことなどから計画を見直し、「状態形容詞」に関する調査を先行させることとした。

「状態形容詞」については、現代日本語の形容詞に関する分類を参考にし、古代語の感情的な状態をあらわす形容詞について調査した高山(2012)に沿って調査語彙を増やし調査を進めた。現在、一部の形容詞について分析をおこなっている。研究期限を迎えたが、今後も研究を継続し、分析内容を精査したうえで論文化していく予定である。

-
- i 「源氏物語における主格表現としてのハダカ格とノ格について」『人間文化論叢』第5巻、pp.231-241、2003年
- ii 「古代日本語におけるハダカ格について」学位論文、2004年
- iii 「絶対格的名詞- の展開」シンポジウム「日本語史における主語表示 その変遷と背景にあるもの」日本語文法学会第7回大会（於神戸大学）予稿集、pp.103-111、2006年
- iv 「主語表示の名詞ノと名詞ガ 源氏物語における用法から」『対照言語学研究』第18号、pp.49-62、2008年
- v 「平安期日本語における動詞述語文の主語標示 ノ格とガ格のふるまいから」『日本語形態の諸問題』須田淳一・新居田純野編（ひつじ書房）、pp.191-202、2010年
- vi 「平安期日本語における感情的な状態をあらわす形容詞を述語とする文の対象語についての一考察 『いとほし』『かなし』『ゆかし』の分析をとおして」『対照言語学』22号、pp.83-93、2012年
- vii 『日本語文法・形態論』鈴木重幸（むぎ書房）1972年
- viii 「書評（近藤泰弘 2015）に答える 言語類型に関する研究の参照についての問題を中心に」『宇都宮大学国際学部研究論集』第43号、pp.43-62、2017年
- ix 「言語分析における『ゼロ記号』の意義をめぐって 格標示機能に焦点をあてて」『歴史言語学』第7号、pp.17-33、2018年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高山道代	4. 巻 第7号
2. 論文標題 言語分析における「ゼロ記号」の意義をめぐって：格標示機能に焦点をあてて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高山道代	4. 巻 第43号
2. 論文標題 書評（近藤泰弘2015）に答える 言語類型に関する研究の参照についての問題を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 宇都宮大学国際学部研究論集	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

『宇都宮大学国際学部研究論集』第43号に関しては下記のURLで公開されている。 https://uuair.repo.nii.ac.jp/records/11077
--

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------